

いちご総合防除実践指標

番号	予防	判断	防除	作業時期	主な対象 病害虫・雑草	実践技術	実践ポイント	点数	チェック 欄	
									目標	実績
1		○		栽培開始前	病害虫、 雑草全般	防除計画作成	栽培開始前に、年間の具体的な病害虫、 雑草の防除計画を立てる。 生物農薬を使用する場合、効果を損なわ ないために十分な関連情報の収集に努め る。	1		
2	○		○	親株管理	病害虫全般	健全親株の使用	親株は毎年更新し、ウイルスフリー苗の 利用など、病害虫の感染のおそれがない ものを使用する。入手後は病害虫の発生 がないことを確認し、必要に応じて防除 を実施する。	2		
3	○		○	親株管理	病害虫全般	清潔な培土・資 材の使用	親株栽培の培土や資材は病害虫に汚染さ れていない清潔なものを使用する。	2		
4	○			親株管理	病害全般	雨よけ栽培	雨よけ栽培を実施するとともに水はねを 避け、病害のまん延防止を図る。	1		
5	○			親株管理	病害全般	排水対策	ほ場内外の排水対策に留意し、ほ場内が 過湿とならないようにする。	1		
6	○			親株管理	病害全般	給液の適正管理	培養液を適正に管理する。 (pH・EC・給液量)	1		
7	○			育苗管理	土壌病害虫、 雑草	育苗時の資材管 理	育苗に用いる培土や資材は、病害虫に汚 染されていないものを使用する。	2		
8	○			育苗管理	炭疽病等	雨よけ育苗	育苗は雨よけ条件下で行う。	1		
9	○			育苗管理	病害全般	育苗時の水管 理・湿度管理	育苗時は頭上かん水を避け、底面給水等 を行うなどして病害のまん延防止を図 る。なお、底面給水ではポット内が滞水 しないようにする。	1		
10	○			育苗管理	病害全般	育苗時の水管 理・湿度管理	育苗時のかん水は夕方以降を避け、高温 多湿状態とならないよう注意する。ま た、過度なかん水とならないよう留意す る。	1		
11	○			育苗管理	病害全般	育苗時の水管 理・湿度管理	ポットの間隔を随時広げ、通風を良く し、多湿にならないようにする。	1		
12	○			育苗管理	病害全般	育苗時の水管 理・湿度管理	施設内に循環扇や換気扇を設置する。	1		
13	○			育苗管理	飛来害虫	防虫ネットの設 置	育苗施設への害虫の侵入を防止するた め、施設開口部に防虫ネットを設置す る。	1		
14	○			育苗管理	ハダニ類、 炭疽病、 うどんこ病等	育苗後期の防除 徹底	病害虫の本ぼへの持ち込みを防ぐため、 育苗後期に防除を徹底し、健全苗のみを 定植する。	2		

番号	予防	判断	防除	作業時期	主な対象 病害虫・雑草	実践技術	実践ポイント	点数	チェック 欄	
									目標	実績
15	○			育苗管理	ハダニ類	炭酸ガス処理による防除	定植前の苗を高濃度炭酸ガスによりくん蒸処理することで、ハダニ類の発生と薬剤感受性の低下を防止する。	1		
16	○			育苗管理	ハダニ類、 ハモジトリ、 アブラムシ類、 アザミヤカ類等	定植前の土壌処理剤の施用	定植前のかん注剤や粒剤の施用により定植後の病害虫発生を省力的に抑制する。	1		
17	○		○	本ぼの定植準備	土壌病害虫	本ぼの土壌消毒	前作における土壌病害やセンチュウ類の発生程度に応じ、適切な土壌消毒を行う。	1		
18	○			本ぼの定植準備	土壌病害虫	本ぼの土壌消毒	土壌消毒は、化学農薬以外の土壌還元消毒や太陽熱消毒等で実施する。	1		
19	○			本ぼの定植準備	カバ 耕ノバ I 等	完熟堆肥の投入	家畜糞の入った堆肥を投入する場合、完熟したものを窒素含有量等を考慮して施用する。	1		
20	○			本ぼの定植準備	炭疽病、 灰色かび病	排水対策	ほ場周辺に排水溝を掘るなど、排水対策に留意し、水はけを良好に保つ。	1		
21	○			本ぼの定植準備	土壌病害虫、 雑草	汚染土壌の持ち込み防止	雑草や土壌病害、センチュウ類侵入防止のため、耕起を行う際は、発生がない、あるいは発生程度の低いほ場から順に行く。 ほ場を移動する際には、ロータリ等農機具、長靴等をこまめに洗浄及び消毒する。	1		
22	○			本ぼ定植後	雑草	雑草防除	有色マルチの使用で、畝間や株間の雑草を抑制する。	1		
23			○	本ぼ定植後	ハダニ類、 炭疽病、 うどんこ病	開花前（蜜蜂導入前）までの病害虫防除	開花前（蜜蜂導入前）までに、蜜蜂に長期間影響する薬剤に注意しながら病害虫の防除を徹底する。	1		
24			○	本ぼ定植後	病害虫全般	保温開始時の防除徹底	秋に発生している病害虫を翌年に持ち越さないため、保温開始時に防除を徹底する。なお、天敵の導入を予定している場合は、薬剤の天敵への影響日数に注意する。	1		
25	○		○	栽培中随時	コナジラミ類	非散布型薬剤の使用	農薬散布の労力軽減を図るため、必要に応じてピリプロキシフェン剤を設置する。	1		
26			○	栽培中随時	コナジラミ類、 アブラムシ類、 アザミヤカ類	微生物農薬の使用	害虫の薬剤抵抗性発達を回避するため、ベキロマイセス フモソロセウス剤等の微生物農薬を有効に使用する。	1		
27			○	栽培中随時	炭疽病、 うどんこ病、 灰色かび病	微生物農薬の使用	病害の薬剤耐性発達を回避するため、タラロマイセス フラバス剤、バチルス スプチリス剤等の微生物農薬を有効に使用する。	1		
28			○	栽培中随時	ハダニ類	天敵の利用	ハダニ類の薬剤抵抗性発達を回避するため、ミヤコカブリダニやチリカブリダニを有効に使用する。	1		
29			○	栽培中随時	アザミヤカ類	天敵の利用	アザミウマ類の薬剤抵抗性発達を回避するため、ククメリスカブリダニやアカメガシワクダアザミウマ等を有効に使用する。	1		

番号	予防	判断	防除	作業時期	主な対象 病害虫・雑草	実践技術	実践ポイント	点数	チェック 欄	
									目標	実績
30			○	栽培中随時	アブラムシ類	天敵の利用	アブラムシ類の薬剤抵抗性発達を回避するため、コレマンアブラバチを有効に使用する。	1		
31	○		○	栽培中随時	ハダニ類、コナジラミ類、アブラムシ類、うどんこ病等	気門封鎖型薬剤の使用	病害虫の薬剤抵抗性が発達しにくい、気門封鎖剤を活用する。 【注意】薬液が病害虫に直接かからなければ効果が得られないので、十分量をていねいに散布する。	1		
32	○			栽培中随時	ハダニ類、アブラムシ類、アザミヤカメ類、ヨトウムシ類等	雑草防除	雑草を発生源とする害虫の飛び込みや発生を抑制するため、ほ場内外の除草に努める。	1		
33	○			栽培中随時	ハダニ類、アブラムシ類、アザミヤカメ類、ヨトウムシ類等	防草シートの利用	防草シートの使用などで、ハウス周辺の雑草を抑制する。	1		
34	○			栽培中随時	飛来害虫	光反射シートの設置	光反射シートをハウス周辺部に設置する。	1		
35	○			栽培中随時	アザミヤカメ類、アブラムシ類、ハモンヨトウ	防虫ネットの設置	施設内への害虫の侵入を防止するため、施設開口部に防虫ネットを設置する。	1		
36	○		○	栽培中随時	飛来害虫	粘着トラップの設置	色彩粘着板等を多数設置することでハウス内の害虫を誘殺し、害虫密度を低下させる。	1		
37	○		○	栽培中随時	病害虫全般	下葉、花房の整理	下葉、収穫済み花房を整理し、病害虫の付着を防止するとともに、薬剤散布の効果を高める。	1		
38	○		○	栽培中随時	炭疽病、うどんこ病、灰色かび病	罹病株の早期発見と適正処理	罹病株や罹病部位は、発見次第、早期に除去してほ場外に出し、埋設・嫌気発酵処理するなどして適切に処分する。	1		
39	○			栽培中随時	病害全般	温湿度管理	施設内が高温・多湿にならないように、適正なかん水と適切な換気を行うとともに、必要に応じて循環扇や換気扇を設置する。	1		
40	○			栽培中随時	病害虫全般	適正な施肥管理	土壌診断を行い、適正な施肥を行うことで健全な作物育成を行う。特に急激な肥効、肥料切れは発病を助長するので、品種の特性及び生育に応じた適正な施肥量を守る。	1		
41		○	○	栽培中随時	病害虫全般	化学農薬の選択	天敵等の生物農薬を利用する体系で化学農薬を散布する場合は、天敵に影響の少ない剤を選択し、影響期間を考慮して使用する。	1		
42		○		栽培中随時	飛来害虫	トラップによる発生状況把握	色彩粘着板やフェロモントラップ等を利用して害虫の発生状況を把握する。	2		
43		○		栽培中随時	病害虫全般	病害虫発生状況の把握	ほ場内を見回り、病害虫・雑草の発生状況を把握するとともに、気象予報、前作の被害、近隣の作物や施設周辺の状況等を考慮して防除の要否、防除時期を判断する。	2		

番号	予防	判断	防除	作業時期	主な対象 病害虫・雑草	実践技術	実践ポイント	点数	チェック 欄	
									目標	実績
44		○		栽培中随時	病害虫全般	病害虫発生予察情報の確認	農業総合研究センター防除課が発表する病害虫発生予察情報や地域予察情報等を入手し、病害虫防除要否、防除時期の判断に活用する。 https://www.pref.tochigi.lg.jp/g59/	2		
45		○	○	栽培中随時	病害虫全般	薬剤抵抗性発達の防止	薬剤抵抗性の発現を防止するため、農薬を散布する場合は、RACコード、抵抗性発達リスク等を参考に同一系統薬剤の過度の連用を避け、ローテーション散布する。 育苗時や定植時に使用した成分を含む薬剤を本ほでも使用する場合には、連続使用とならないよう留意する。 さらに、地域内で薬剤抵抗性又は薬剤耐性が確認されている薬剤を当該地域では極力使用しない。	2		
46				栽培中随時	病害虫全般	農薬の適正使用	作物の生育及び病害虫・雑草の発生状況に合わせ、被害を確実に抑えながら、薬剤の使用が最小限となるよう、使用基準（希釈倍数、使用液量、使用時期など）に従って農薬を適正に使用する。 薬剤散布の際は、防除時に施設を一時的に閉める、飛散し難い剤型や散布ノズルを使用するなど適切な飛散防止措置を講じる。	1		
47				栽培中随時	病害虫全般	作業日誌の記帳	各農作業の実施日、病害虫・雑草の発生状況、栽培管理状況、農薬を使用した年月日及び場所、使用した農薬の種類又は名称、単位面積当たりの使用量又は希釈倍数などを作業日誌として記録する。	2		
48				栽培中随時	病害虫全般	情報収集	都道府県や農業者団体などが開催する病害虫・雑草の総合防除に関する研修会、農薬の適正使用に関する研修会等に参加し、適切な防除に必要な情報等を入手する。	2		
49	○			栽培終了後	病害虫全般	施設の蒸し込み	施設内の病害虫を死滅させるため、栽培終了後に施設を密閉して蒸し込む。 栽培終了後の残さは病害虫の発生源となるため、速やかにほ場外へ持ち出すか、すき込む等適切に対処する。	2		

合計 60 点